

## 測定・評価 6 (738~745)

座長 赤木 愛和・織田 揮準

- 738 見かけの「正答」について(1)  
——学力調査の問題別正答率解釈上の一技法——  
国立教育研究所 赤木 愛和
- 739 見かけの「正答」について(2)  
——「正負の数」の加法・減法に適用した問題別正答率の補正——  
国立教育研究所 原田 秀子
- 740 数学学力の追跡的研究  
——中学における教師作成テストの因子分析——  
国立教育研究所 山本 正明
- 741 人格特性検査における強制選択法の適用について(2)  
日本大学 岡村 浩志
- 742 質問文に挿入された程度量副詞の判断過程への影響  
三重大学 織田 揮準
- 743 テストの情報量  
東北大学 繁樹 算男
- 744 テストにおける反応の一貫性の個人差  
京都七条公共職業安定所 峯 作二郎
- 745 行動観察の信頼性に関する実験的研究  
——オバート条件とカバート条件——  
神奈川リハビリセンター 佐々木 和義

赤木・原田(738・739)に対して、繁樹から図1の $S_i$ と $\bar{S}_i$ の決定にあたり直接確率による仮設検定が行われているが、optimizationの発想を取り入れる必要があるのではないかなどの質疑が出された。これに対して、 $S_i$ や $\bar{S}_i$ と判定された個人をどう扱うかを問題にするとき $S_i$ 、 $\bar{S}_i$ の決定法の妥当性が問題になると思われるが、現段階では、テストの得点をそのまま用いて $S_i$ 、 $\bar{S}_i$ の判定をすべきか、それとももう少し内輪に評価すべきかを検討している段階であること、および、今後も学力調査の問題別正答率の解釈という観点から研究を進めたいとの回答があった。

山本(740)は中学生の数学学力を中学1年から3年までに行われた中間テストと期末テストをもとに因子分析を行い、数学学力と強いかかわりをもつ数学の因子は学年によって変化することを示した。赤木から英語学力においては、中学ではrepeatと、高等学校段階では推理的な能力と強い関係があるとする芝(東大)の英語能

力に関する時系列的研究の紹介があった。

岡村(741)に対して、繁樹から社会的望ましさを排除しようとするこの種の研究は、かえって貴重な情報を失うことになるのではないかという疑問が出され、岡村から、強制選択型尺度の2つの項目の肯定率が各50%の場合には相殺効果が働き、情報のロスが生ずる可能性があるが、強制選択型尺度と単一型尺度のいずれが優れているかについての結論はまだ出ていないとの回答があった。

織田(742)に対して、赤木、繁樹、岡村らから程度量副詞が質問文に挿入されていると否とにかかわらず反応が似ているならば、質問文に程度量副詞を挿入してもいいのではないかなどの質疑が出され、織田から、本研究では程度量副詞の質問文への利用にあたり細心の注意を払わなければならない点を強調したいことと今回の報告は短時間に連続的に質問文が呈示されるという条件下の結果であり、今後は反応時間が十分に与えられる条件下における程度量副詞の効果について検討したいとの回答があった。

繁樹(743)に対して、野口(東学大)から論文表題中の「情報量」ということばの適否、(1)式の第1項に $P(x)$ を含めるべきではないか、効用関数の決定法の合理性等について質疑があり、「情報量」は適切ではなく「有効性」と改めたいこと、(1)式は指摘された通り… $d\theta p(x)dx$ …とすること、効用関数を定めることは、その代替物を探すことよりも有望であることが回答された。

峯(744)に対して、赤木、繁樹、織田から反応の一貫性という概念を導入したことの意義や峯の研究とS—P表との関連等について質問が出され、能力が変動する立場から変動巾に対する心理学的理解に、またテストの妥当性の個人差という立場からテストのculture freeの問題等の理解に役立つこと、また、S—P表との関連については今後検討したいとの回答があった。野口からS—P表では反応が固定的にとらえられているのに対し、峯は個人の能力を確率変数的に動くものとしてとらえているとの意見が出された。

最後の発表である佐々木・石川(745)については時間不足のため十分な討議ができなかったが、観察の信頼性が、観察データがどのように使用されるかを予め観察者に知らせることにより強い影響を受けるという興味深いものであった。  
(赤木愛和・織田揮準)